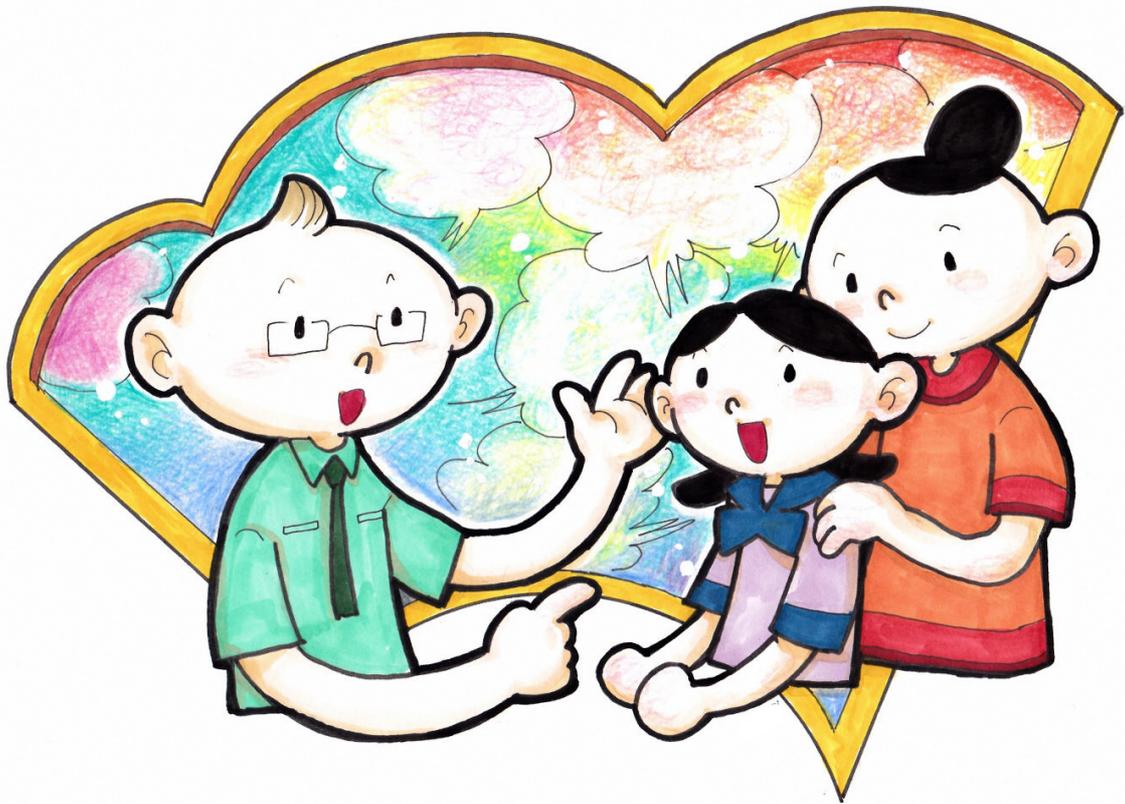


特別な教育的ニーズのある中学生の

進路指導ガイド

～生徒がなりたい自分にチャレンジする～



平成29年9月

秋田県総合教育センター

今年「特殊教育」から「特別支援教育」に転換後、10年という節目の年を迎えました。この間、秋田県では、全ての公立学校に特別支援教育コーディネーターが配置されたり、校内委員会が設置されたりするなど、校内支援体制の整備が急速に進みました。

学習指導要領（平成29年3月公示）では、通常の学級にも、障害のある児童生徒のみならず、特別な支援を必要とする児童生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教職員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解することが不可欠であるとし、全ての校種で更に特別支援教育を推進する重要性を示しました。また、特別支援学級に在籍する児童生徒や通級による指導を受ける児童生徒全員に対して、個別の（教育）支援計画と個別の指導計画の二つの計画を作成することとしました。この背景には、「障害者の権利に関する条約」や昨年4月に施行された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が影響しています。今後、東京五輪・パラリンピックに向けて、障害理解教育や心のバリアフリーのための交流及び共同学習を推進し、お互いを理解し、認め合い、支え合う「心の育成」が重要になってきます。

秋田県では特別支援教育が理解・推進されてきた一方で、次のような課題もあります。

- ・インクルーシブ教育システムの推進と障害理解教育の充実
- ・管理職のリーダーシップと年間計画に基づく支援体制の構築
- ・管理職や特別支援教育コーディネーターによる校内支援体制の整備
- ・高等学校の通級による指導の制度化に伴う環境整備
- ・特別支援教育支援員の資質向上（平成29年4月現在717名）
- ・特別な支援を必要とする児童生徒に応じた授業づくり
- ・就学前から学校卒業後までのスムーズな移行支援のシステムづくり
- ・中学校における計画的な進路学習と生徒の自己理解の促進
- ・「個別の支援計画」等を活用した保護者との合意形成

本ガイドは、主に特別支援学級に在籍している生徒の計画的な進路学習を進めるための一助になればという願いを込めて作成しました。「障害特性から書くことに困っているために高等学校の入学は難しい」、「保護者と学校に意見の食い違いがあって進路先が決まらない」、「不登校傾向生徒の受皿が少ない」、「特別支援学校の入学までの流れが分からない」等の理由から、中学3年生の進路決定時期になってから特別支援学校に教育相談をするケースが見られます。特別な支援を必要とする生徒については、中学1年生段階から、計画的・継続的に進路指導を進める必要があります。進路決定は、保護者や学級担任が決定するのではなく、生徒の自己理解を促しながら、本人が自己選択することが大切です。生徒がなりたい自分にチャレンジできるように、一人一人の教育的ニーズに応じた進路指導を実践するための一冊になれば幸いです。

「特別な教育的ニーズのある中学生の進路指導ガイド」目次

1 特別な教育的ニーズのある生徒の進路指導	1
(1) 進路指導とは	1
(2) 進路指導の位置付け	1
(3) 進路の発達課題	2
(4) 進路指導の主な学習内容	2
(5) 中学生に身に付けたい基礎的・汎用的能力	2
2 特別支援学級に在籍する生徒の「進路学習年間指導計画」	3
(1) 1年生の年間指導計画(例)	3
(2) 2年生の年間指導計画(例)	4
(3) 3年生の年間指導計画(例)	6
コラム1 「よい人生にするためには よい自己選択が必要！」	8
コラム2 「生徒に付けたい力とは？」	8
3 特別な教育的ニーズのある生徒の自己理解を育む進路指導	9
(1) 進路指導における自己理解	9
(2) 特別な教育的ニーズのある生徒の自己理解	9
(3) 自己理解を促す支援方法	9
(4) 自己理解の支援の3段階	10
コラム3 「中学校の特別支援学級で大事にしたいこと」	11
4 進路指導の実際「進学に係る六つの事例紹介」	12
事例1 通常の学級に在籍する自閉症スペクトラム障害(ASD)のある生徒が高等学校に入学したケース	12
事例2 特別支援学級に在籍する注意欠如多動性障害(ADHD)のある生徒が高等学校に入学したケース	13
事例3 通常の学級に在籍する自閉症スペクトラム障害(ASD)のある生徒が高等学校に入学したケース	14
事例4 特別支援学級(難聴)に在籍する生徒が高等学校に入学したケース	15
事例5 通常の学級に在籍する生徒が特別支援学校高等部に入学したケース	16
事例6 特別支援学級に在籍する生徒が特別支援学校高等部に入学したケース	17
コラム4 「自分らしく生き生きと・・・」	18
5 特別な教育的ニーズのある生徒の進学に関する情報	19
(1) 進学の手続き	19
(2) 高等学校受検に際しての特別な配慮	19
(3) 入学者選抜学力検査における都道府県の「合理的配慮」の取組状況	19
(4) 特別支援学校高等部入学までの流れ	20
(5) 秋田県特別支援学校高等部卒業生の進路先について	21
(6) 個別の(教育)支援計画・個別の指導計画の活用	21
(7) 地域の組織の活用	21
主な引用・参考文献	22

1 特別な教育的ニーズのある生徒の進路指導

(1) 進路指導とは

- ・これまで進路指導＝出口指導・進学指導として捉えられがちであったため、卒業年次に進路指導が集中して行われてきました。しかし、進路指導は、「自己の生き方」を考え、「進路に関する発達課題」に積極的に取り組み、最終的には個々人のキャリアにおいて「自己実現」を目指す教育活動です。
- ・進路指導の取組は、キャリア教育の中核をなすものです。キャリア教育は目標（理念）であり、進路指導はそれを達成するための手段・方法という考え方ができます。進学指導偏重型の進路指導ではなく、「生き方指導」としての進路指導を実践していくことが、キャリア教育を積極的に推進することにつながります。

(2) 進路指導の位置付け

- ・中学校学習指導要領第1章「総則」（平成29年3月公示）には、「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を中心としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」と示されています。
- ・進路指導は、全ての教育活動を通して推進されるべき教育活動であり、その教育活動の中で、現在及び将来の「生き方」を考え行動する態度や能力を育成していくことが必要です。各学校においては、特別活動、道徳、総合的な学習の時間、各教科、及びそれ以外の時間において、必要とされる態度・能力を育成することが期待されています。
- ・知的障害特別支援学級では、各教科等を合わせた指導、自立活動、総合的な学習の時間の中で必要とされる態度・能力を育成することが期待されています。
- ・中学校での3年間は、気持ちが不安定になりやすい傾向にあります。思春期の壁を乗り越え、生徒自身が自己選択・自己実現できる進路指導を展開するためには、卒業後の姿がイメージできるように、体験的な活動を多く取り入れ、自尊感情を高めながら進める必要があります。

(3) 進路の発達課題

①小学校（進路の探索・選択に係る基盤形成の時期）

- ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- ・身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上
- ・夢や希望、憧れる自己イメージの獲得
- ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成

②中学校（現実的探索と暫定的選択の時期）

- ・自己理解と自己有用感の獲得
- ・興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成
- ・進路計画の立案と暫定的選択
- ・生き方進路に関する現実的探索



③高等学校（現実的探索・試行と社会的移行準備の時期）

- ・自己理解の深化と自己受容
- ・選択基準としての職業観・勤労観の確立

（４）進路指導の主な学習内容

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| ①自己理解・他者理解・多様性尊重に関する事 | ②進路適性に関する事 |
| ③進路情報の収集・選択・活用に関する事 | ④社会見学・職場見学に関する事 |
| ⑤就業体験・実習に関する事 | ⑥地域・職業生活に関する事 |
| ⑦進路選択・決定に関する事 | ⑧関係機関の活用に関する事 |

（５）中学生に身に付けたい基礎的・汎用的能力

- ・基礎的・汎用的能力は、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力と考えられています。具体的内容については、「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の四つの能力に整理されています。

①人間関係形成・社会形成能力

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力。

②自己理解・自己管理能力

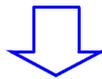
自分が「できること」「意義を感じる事」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力。

③課題対応能力

仕事をする上で様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立てて、その課題を処理し、解決することができる力。

④キャリアプランニング能力

「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力。



- ・特別な教育的ニーズの生徒は、知識や技能が断片的になりやすく、学んだことが実生活に生かされにくかったり、生活経験の不足から主体的に取り組む意欲が低かったりする傾向にあります。上記の四つの能力を身に付けるためには、職場見学・体験、ソーシャルスキルトレーニング等の具体的な活動を増やすことが大切です。また、授業では、聞く時間よりも考えたり作業したりする時間を増やすことや、本時のまとめでは学んだことを自分の未来の姿と結び付けることが必要です。

2 特別支援学級に在籍する生徒の「進路学習年間指導計画」

- ・特別な教育的ニーズのある生徒の進路指導は、障害の状態や特性及び心身の発達段階を的確に把握した上で、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動及び学級や学年の取組などを相互に関連付けて指導計画を作成します。ここでは、特別支援学級に在籍している生徒の進路学習を進めるための「進路学習年間計画」(例)を紹介します。

(1) 1年生の年間指導計画(例)

〈目標〉

- ・自分や友達の得意なことや好きなことを見つけて、協力して活動に取り組む。
- ・進路・職業に関する関心を高め、将来の夢や希望の実現に向けて、自分の課題を明らかにする。

月	題材名	指導目標	学習内容・方法
4	中学校生活がスタート!	新しい中学校生活を知るとともに、1年間の自分のやりたいことや、卒業後の自分の姿をイメージする。 【キャリアプランニング能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・3年間の進路学習の概要と意義を理解する。 ・中学校に入学した感想を記入し、中学校生活への希望や不安を自由に書いたり、話したりする。 ・1年間の自分の目標を設定する。
5	目的をもって学ぶ	学ぶことの意義について考え、現在学んでいること、将来へのつながりを見いだす。 【自己理解・自己管理能力】 【課題対応能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生として身に付けたい力、なぜ学ぶのかについてワークシートに書いたり、発表したりする。 ・学校や家庭での学習の現状と課題を認識し、自分に合った学習方法を見付ける。
6	自分を知ろう	自己評価や他者評価を通して、自分自身の新たなよさに気付く。 【自己理解・自己管理能力】 【人間関係形成・社会形成能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身を知ることの重要性と自己理解の方法を理解する。 ・自己認識の度合いをレーダーチャートで表し、短所は見方を変えればよい面であることを指導する。 ・「〇〇さんのよいところ」などのワークシートを活用し、友達からの意見を自己理解につなげる。
7 8	企業訪問をしよう	身近な人々の職業に目を向け、その多様性に気付くとともに、職業観の基礎を培う。 【キャリアプランニング能力】 【課題対応能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・働く意義について考える。 ・多様な生き方(ライフスタイル)があることを学ぶ。 ・職業人にインタビューする方法やアンケートの取り方を学ぶ。 ・勤務時間や休憩時間、休日の過ごし方などをまとめて、学年集会や学級で発表し、情報を共有する。

9 10	良好な人間関係づくりにチャレンジしよう①	相互に個性の違いに気付き、それを認めることの大切さを理解する。 【自己理解・自己管理能力】 【人間関係形成・社会形成能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・人の話の聞き方や人への質問の仕方など、基本的なコミュニケーションスキルを身に付ける。 ・構成的グループエンカウンターの手法を用いた活動を通して、友達同士の交流を広げる。
11 12	集団の中で自分の役割を果たそう	自分の役割や集団の中で自分を生かすことの大切さを自覚する。 【自己理解・自己管理能力】 【人間関係形成・社会形成能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・学校や家庭、地域でどういう立場や役割があるか考える。 ・身の回りで行えるボランティア活動とその理由について自由に発表する。実際に学校や地域でボランティア活動を行い、感想を語り合う。
1 2 3	私の夢や希望を実現するために	2年生に進級する前に、中学校卒業後の自分の姿を想像し、どのような自分でありたいか夢や希望を膨らませる。 【キャリアプランニング能力】 【課題対応能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ選手や芸能人など、自分の憧れの人の生き方を調べて発表する。 ・10年後の自分の姿を想像して、どんな仕事をしているか、家庭や地域でどう過ごしているかワークシートにまとめる。

(2) 2年生の年間指導計画 (例)

〈目標〉

- ・将来の生活へのイメージを広げ、そのために必要なことを考えたり、実践したりする。
- ・職業や進学先について理解を深めるとともに、様々な体験活動を通して、望ましい職業観や勤労観を形成する。

月	題材名	指導目標	学習内容・方法
4	2年生の生活をデザインしよう	中堅学年として学校における立場や役割を自覚し、新たな希望をもつ。 【自己理解・自己管理能力】 【キャリアプランニング能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間を振り返るとともに、2年生として具体的な目標（学習・学校生活・家庭生活等）を立てる。 ・3年生にインタビューした結果をまとめて発表する。保護者から励ましの言葉を書いてもらう。 ・進路指導主事の講話を計画し、中学校卒業に向けて、2年生として何が大切かを知る。

5 6	「学ぶこと」と「働くこと」を考えよう	<p>学ぶこと・働くことの意義を理解する。</p> <p>【自己理解・自己管理能力】</p> <p>【キャリアプランニング能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜ、人は学ぶのだろうか」について、代表者によるパネルディスカッションを行う。 ・学習の悩みについて考え合ったり働く意義についてのアンケート結果を基に話し合ったりする。 ・保護者にもアンケートをお願いして比較する。
7 8	職場体験学習をしよう	<p>職場体験学習を通して、職業の多様性について理解する。</p> <p>【キャリアプランニング能力】</p> <p>【自己理解・自己管理能力】</p> <p>【課題対応能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の1日の生活に関わっている職業を調べる。 ・身近な「職業と産業」を調べる。 ・職場体験学習のねらいを確認してチャレンジする。学習で感じたことをまとめて、学年で発表会を設定する。 ・学級通信を通して、進路学習について保護者への啓発を図る。
9	良好な人間関係づくりにチャレンジしよう②	<p>1年生で修得したスキルを基盤に、より積極的に相手に関わるスキルを身に付ける。</p> <p>【自己理解・自己管理能力】</p> <p>【人間関係形成・社会形成能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手を尊重しながら上手に断る方法を考えるために、SST（ソーシャルスキルトレーニング）を取り入れ、ペアやグループになって頼む役と断る役を演じ、相手を傷付けない断り方を体験する。 ・相手を思いやりながら断るには表情や声の大きさ、相手との間隔など、気配りの大切さに気付く。
10 11	職業の適性を考えよう	<p>職業体験学習を基に職業の特性について考えるとともに、自分の個性や適性を知り、自己理解を深める。</p> <p>【自己理解・自己管理能力】</p> <p>【キャリアプランニング能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ職場で体験したグループで集まり、職業の特性を理解し、その職業に就くために必要な力（適性）を考える。 ・グループで出された意見を基に、職業生活を送るために必要な力を整理するとともに、実生活で生かせるようにするための方法を考える。 ・職業適性検査や職業レディネステストなどを実施し、自己評価や他者評価を行い、適性を生かした進路選択につなげる。

12 1	上級学校を調べよう	<p>上級学校の種類や特徴，及び職業に求められる資格や学習歴の概略を考え，上級学校で学ぶ意義を深め，学ぶための制度と機会を知る。</p> <p>【キャリアプランニング能力】 【課題対応能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校卒業後から就職までをフローチャートに記入する。個人で考えた後，グループで話し合い，上級学校の意義を考える。 ・上級学校調査，進路講演会，身近な卒業生を招いての座談会などを行い，上級学校の内容・特色を理解する。
2 3	進路計画を見直そう	<p>1年間の進路学習を振り返り，自己の適性を踏まえた上で進路計画を見直し，新たな課題を明確にする。</p> <p>【キャリアプランニング能力】 【自己理解・自己管理能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が成長した点と課題をワークシートにまとめる。 ・中学校卒業後の進路先と，将来就きたい職業について，具体的に調べてまとめる。 <p>例：将来予想図の作成 自分史年表の作成</p>

(3) 3年生の年間指導計画 (例)

〈目標〉

- ・体験入学や職場実習を重ねて，上級学校への期待感を高める。
- ・自分の個性や適性を多面的に理解し，自分の希望する新しい生活に踏み出す力を養う。

月	題材名	指導目標	学習内容・方法
4	中学校生活最後の1年間をデザインしよう	<p>最終学年1年間のスケジュールを立て，明確な目標をもつ。</p> <p>【自己理解・自己管理能力】 【キャリアプランニング能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の行事予定や予想される出来事，1年間の抱負などをワークシートに記入する。 ・進路調査を基に面談を計画する。 ・3年生になって頑張りたいことを学級通信に紹介し，意欲を高める。
5 6	自分自身を見つめ直そう	<p>学力面だけでなく，興味・関心，性格，価値観など，多角的に自分を捉えたり，他者評価を取り入れたりして，自分の生き方や進路選択に生かす。</p> <p>【自己理解・自己管理能力】 【人間関係形成・社会形成能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校生活での活動（学習・生徒会・行事・委員会や係活動・ボランティア活動）の足跡を確認する。 ・自分の特徴，友達のよいところを書き出した「進路指導ファイル」を作成し，進路先や将来の職業選択の参考にする。
7	卒業後の進路を考えよう	<p>希望している進路先の情報を集め，進路先を決定するための自分の考えをまとめる。</p> <p>【キャリアプランニング能力】 【課題対応能力】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・上級学校を選択する際，重視することを記入し，「私のものさし」を作成する。 ・必要な情報を収集できるように，学校案内や募集要項を取り寄せる。

8 9	高等学校体験 入学にチャレ ンジ	体験入学の目的を理解し、自分が 希望する高等学校の特色を知る。 自分の適性を生かした進路選択に ついて考える。 【キャリアプランニング能力】 【自己理解・自己管理能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・体験入学が目的ではなく手段として不可欠な機会であることを認識できるように、参加するための心構えをワークシートで確認する。 ・学校案内に記載されていることや数値的なものだけでなく、校舎の外観、周りの風景、印象など、自分で感じたことを記録する。 ・夏期休業中を利用して、卒業生を迎えて生の声を聞く。
10 11	進路先を選択 しよう	これまでの進路学習を通じて得た 情報を基に、自分で主体的に進路先 を選択する。 【課題対応能力】 【キャリアプランニング能力】 【自己理解・自己管理能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・進路学習で使用してきた資料を事前に読んで、改めて自分の適性やよさに気付く。 ・調べたり、見学したりした上級学校を挙げ、その学校の特徴を確認する。 ・生徒本人、保護者が納得できる面談を実施する。
12 1 2	私の進路計画 を実現させよ う	進路希望先に入学するための諸条 件を理解し、具体的な計画を立てる。 受検に当たっての心構えや留意点 を学ぶ。 【課題対応能力】 【自己理解・自己管理能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・入試までのタイムスケジュールを確認し、計画的に準備をしたり、合格するために必要な目標を具体的にワークシートに記入したりする。 ・目標を保護者と共通理解を図る。 ・受検マニュアルを作成し、確認する。 ・面接試験でのロールプレイを行う。
3	将来の生き方 について考え よう	卒業後の生き方を考え、新しい生 活への心構えをまとめる。 卒業を前に、力強く将来へ向かう 意欲や態度を育む。 【キャリアプランニング能力】 【自己理解・自己管理能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・ライフキャリアチャートを通して、自分が生まれてからこれまでの出来事を思い起こすとともに、卒業後の人生についても記入する。(幼少期や小学生期は家族と話し合う) ・将来の夢や希望の実現に向けて、どのような生き方をしたいか、努力することも記入し、意見交換する。 ・進路学習のまとめとして、「未来の自分へ」というタイトルで作文を書く。 ・保護者にも協力をお願いし、我が子へのアドバイスを書いてもらう。

『コラム1』

「よい人生にするためには よい自己選択が必要！」

人は1日に約9,000回の選択をされると言われています。朝起きてから夜寝るまで、選択の連続です。しかし、人は弱いので常に二つの心が動きます。何かしようとしたとき、「よし、やろう！」という心と、「あーあ、やめようか」という心です。どちらを選択するかは、自分の二つの心の闘いです。よい選択ができれば、よい1日になります。よい1日を繰り返せばよい1週間になります。よい1週間を繰り返せばよい1か月になります。よい1か月を繰り返せばよい1年になります・・・。

つまり、よい人生にするためには、「今」が大切になる。自分で選択すると少くく辛くても頑張ることができます。そして、よい結果になれば自信になります。たとえ失敗してもチャレンジした経験が残り、次への意欲につながります。意欲が出てくるときが、伸びどきです。



『コラム2』

「生徒に付けたい力とは？」



Q：「会社ではどんな人材を求めていますか？」

- ・会社にとって利益につながる事
- ・良好な人間関係を築ける事
- ・生きる力が備わっている事

Q：「特別支援学校に望むことは？」

- ・自分のことを知っている
- ・自己に肯定感をもっている
- ・生きる目的を見いだしている

(株)高島屋横浜店 大橋 恵子氏 「働く広場」2015年4月号より

- ・働くために必要な力としては、決まった時間に起きて一人で通勤できる等の身辺自立が確立していること、基本的な挨拶をはじめ返事や報告ができる等のコミュニケーションスキルが身に付いていること、仕事に対して誇りと責任をもって取り組む力が備わっていること、仕事以外にも楽しみをもっていること、変化する状況の中で自分の役割を果たせること等が挙げられます。
- ・生徒が社会で必要とされる存在となるよう、学校生活の中で自分の役割を果たしながら社会で通用する力（意欲も含む）を育てることが必要です。そのためには、自己理解に基づく未来予想図を描く過程を支援することが大切になります。

3 特別な教育的ニーズのある生徒の自己理解を育む進路指導

(1) 進路指導における自己理解

- ・「自己理解」とは、自分は何者であり、どんな強さや弱さをもっているかを知っているだけでなく、変化する状況の中で、自分の「役割」を考えることです。「自己理解」は、中学生のみに付けたい基礎的・汎用的能力の中に含まれ、「分野や職種に関わらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力である」とされており、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要があります。その具体例として、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（中央教育審議会答申2011年1月）では、「自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動」を挙げています。
- ・子どもの「自己理解」は、外見的なことから内面的なことへ変化し、他者と関わる経験を通して育っていきます。

【自己理解の発達段階】

- 幼 児 期： 自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにする時期
- 小 学 校： 自分の役割を主体的に果たそうとする態度を育成する時期
自分の特徴に気付き、よいところを伸ばそうとする時期
社会の中での自らの役割や、働くこと、夢をもつことの大切さの理解、興味・関心の拡大、自己及び他者への積極的関心の形成の時期
- 中 学 校： 自らの人生や生き方への関心が高まり、自分の生き方を模索し、夢や理想をもつ時期
現実に進路の選択が迫られ、自分の意思と責任で決定しなければならない時期
- 高等学校： 自己の将来の夢や希望を抱き、その実現を目指して進んで学習に取り組む意欲をもち、自己の個性や能力を生かす進路を自らの意思と責任で選択し、決定していく時期

(2) 特別な教育的ニーズのある生徒の自己理解

- ・特別な教育的ニーズのある生徒は、客観的に自己を見つめたり、過去を振り返って未来を推測したりすることが苦手であると言われていています。また、他者と比較して形成される自己理解がネガティブに作用する傾向にあります。客観的に自己理解を図るためには、9歳前後の知的発達が必要であると言われていています。

(3) 自己理解を促す支援方法

- ・生徒の自己理解を図るためには、生徒自身が自己評価する方法と、教師や保護者、周囲の友達などの他者評価による方法があります。
- ・自己評価は、身体的な感覚や自分自身の興味・関心、言動を振り返ることができる記録を活用して自己を分析します。自己分析できるようにするためには、自己分析の項目や方法、時期などを進路学習や啓発的な体験活動などと関連付けたり、同じ項目や

方法で定期的に繰り返し行ったりします。

- ・他者評価は、自己を映し出す鏡であり、客観的に自己を見つめるために有効です。しかし、友達による他者評価がはじめにつながらないように、肯定的な評価をするなど一定のルールを設ける必要があります。他者との関わりを通して自己理解を深めることは、相手の視点に立って考えることであり、学級の相互理解を深めることにもつながり、学級づくりにも効果が期待できます。
- ・教師からの評価や助言は、進路学習をはじめ、定期的な教育相談、呼び出し相談や連絡ノートを活用し、生徒の観察や進路調査結果、会話を基に実施します。
- ・保護者からの評価は、保護者の思いや期待が偏らないように、学級担任と連携しながら助言や示唆をする必要があります。そのためには、学校での様子を伝えたり、相談する機会を設けたりします。
- ・授業では、積極的にICT機器や体験活動を取り入れることが有効です。

(4) 自己理解の支援の3段階

【段階1】

①感覚を通しての自己への気付き（小学校特別支援学級や特別支援学校小学部）

【段階2】

②自分のよさへの気付き

【段階3】

③多様な自己への気付き

④過去・未来からの自分への気付き

⑤理想の自己形成

⑥他者との関わりを通して深める自己理解

⑦先輩、理想の人から自分を見つめる

⑧進路学習や体験活動を通しての自己理解

これらは、指導する順番があるわけではなく、また、重複する内容もあります。

参考：別府哲・小島道生・片岡美華（2014）

「発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育」
ジアース教育新社



この図書では、授業で活用できる自己理解を促すための45のプログラムを紹介しています。



『コラム3』

「中学校の特別支援学級で大事にしたいこと」

中学校の特別支援学級の特徴の一つとして、学級担任だけでなく、教科担任や部活動担当者等、複数の教師が在籍する生徒に対し、関わりをもてるということが挙げられます。

複数の目で、多角的な視点から生徒の実態を把握することによって、生徒の特性やよさに気づき、それをさらに伸ばすための具体的な支援を講ずることができます。中学校の特別支援学級への入級を希望する生徒や保護者の多くは、このことに魅力を感じ、期待を寄せているのではないのでしょうか。さらに、最近では、高等学校への進学を目標に頑張る生徒が多くなってきており、このことから保護者の強い思いが感じられます。

Aさんは、小学校では特別支援教育支援員の先生が付き、中学校では自閉症・情緒障害学級に在籍し、高等学校を卒業後、専門学校に進みました。自動車免許も取得してある会社に就職したのですが、仕事面でいっばいっばいの状況が続き、ついにはパニックを起こして会社を辞めてしまいました。その後、医療機関で発達障害と診断され、本人はもちろん保護者も大きなショックを受けましたが、今ではそのことを受け止め、家事を手伝っています。障害者手帳も申請中とのことでした。

ある保護者が、子どもが4年生（10歳）になったとき、知人から「二分の一成人式ですね。」と声をかけられた際、「そうなんです。成人まであと10年しかないんです。」と答えたそうです。おそらく、その短い言葉の中に、たくさんの心配事が山積みされているのでしょう。

中学校の特別支援学級に在籍している生徒とその保護者にとって、一番気がかりなことは、「将来、社会的に自立できるか」ということです。家庭や小学校、関係機関と連携を深め、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育活動を展開することが、何よりも求められています。入学時から卒業まで一貫した教育ができるよう、キャリア教育の視点を踏まえ、指導内容・指導方法や指導体制を工夫改善して取り組んでほしいものです。

能代市立湊城南小学校 特別支援教育地域センター
特別支援教育アドバイザー 佐藤 昌子



4 進路指導の実際「進学に係る六つの事例紹介」

事例1 通常の学級に在籍する

自閉症スペクトラム障害（ASD）のある生徒が高等学校に入学したケース

〈本事例の概要〉

自閉症スペクトラム障害の診断を受けている生徒で、小学校では特別支援教育支援員が配置されていました。

保護者が生徒の学習状況が伸びないことから、医療機関をはじめ、たくさんの関係機関に相談をしていました。卒業後の進路先は、生徒が小さい頃から関心のあった動物に携われる高等学校への進学を考えていました。

（1）学校での様子

〈学習面〉

- ・数学、理科、英語が苦手だったことから、保護者から少人数学習や個別学習の機会を設けてほしい等の要望がありました。中学校では数学のコース別のグループ編成を工夫したり、放課後を利用した個別指導の時間を設けたりしました。

〈対人・行動面〉

- ・積極的に友達と関わるタイプではなく、休み時間は図書室で好きな本を読んで過ごしていました。周囲の生徒の理解があったため、学級で孤立することはありませんでした。

（2）卒業に向けて

- ・中学2年生から個別の指導計画を作成しました。聞く力やワーキングメモリの弱さへの支援として、スケジュール表や手順表を活用して活動に見通しをもてるようにしたり、苦手教科のつまづきを明らかにして本人の実態に合わせた課題を用意したりしました。
- ・県外の専門高校を目指していましたが、3年生の進路希望調査では、一人暮らしや初めての環境で生活することの意味を理解したことで、県内の高等学校に進路変更しました。
- ・高等学校に関する具体的なイメージをもてるように、積極的に体験入学に参加しました。また、進路選択に幅をもたせるため、本人が所属していた部活動の見学も行いました。
- ・ケアレスミスを防ぐため、入試に向けて「テスト実践マニュアル」を作成しました。
 - ①最初に名前を書く
 - ②テストの枚数と解答用紙を確認する
 - ③問題の全体の量を知る
 - ④分からない問題は後でやる
 - ⑤記号問題は全て答える
 - ⑥選択問題はいくつ選ぶのか確認する
 - ⑦途中で残り時間を確認する
 - ⑧問題の番号と解答用紙の番号が合っているか確認する

（3）まとめ

- ・高等学校に合格後、中学校の特別支援教育コーディネーターと学級担任が高等学校を訪問し、保護者の同意を得て「個別の支援計画」を基に、顔の見える引継ぎをしました。
- ・生徒本人が積極的に体験入学を重ねたことで、高等学校への具体的なイメージをもつことができ、自己選択・決定につながりました。

事例2 特別支援学級に在籍する

注意欠如多動性障害（ADHD）のある生徒が高等学校に入学したケース

〈本事例の概要〉

小学生のときにADHDの診断を受け、同時に服薬を始めた生徒です。中学校に入学後に教室に入れなくなり、中学3年生のときに特別支援学級に入級しました。

中学1年生の知能検査結果では、年齢相応の発達段階でした。中学3年生になり、自分の居場所はできましたが、校内をふらふら歩き回る日々は続きました。中学校では進学先として特別支援学校高等部を提案しましたが、本人は地元の高等学校を望んでいました。

（1）学校での様子

〈学習面〉

- ・学習空白の時間が多く、学年相応の学力が身に付いていませんでした。特別支援学級では簡単な課題を20分くらい取り組んだ後、好きな活動をして過ごしていました。

〈対人・行動面〉

- ・同じ部活動の同級生と休日に遊ぶことはありましたが、学校ではほとんど学級担任や養護教諭と過ごしていました。
- ・「自分には障害がある」と言えば、周りの人は何でも許してくれるという考えをもっていました。

（2）卒業に向けて

- ・3年生の8月に、高等学校の体験入学（3校）に参加し、好きな調理ができる学校は最後まで見学できましたが、他の2校については途中で退席しました。
- ・生徒の学力を評価できる客観的なデータを得るために、9月の実力テストを受けることになっていましたが、テスト中に体調を崩し、1教科も受けられませんでした。このような状況から、保護者と中学校は、地元の高等学校への進学は厳しいと考え始めました。
- ・10月中旬に保護者面談を行った結果、本人の「小さいころから興味のあった調理をしたい。」という気持ちを尊重し、学校と家庭が同じ方向を目指すことを確認しました。進路先を決めたことから、受検に向けてやるべきことがはっきりしました。学校では、進路学習の一環で調理実習や面接の練習に取り組みました。

（3）まとめ

- ・県外にある調理師免許が取得できる高等学校に入学しました。近くに頼りになる親戚の人がいたことも大きな支えでした。中学校入学後に教室に入れなかった日が続きましたが、好きな調理ができる高等学校で頑張るという目標がもてたことで、本人のやる気スイッチがオンに切り替わりました。卒業した1年目の夏休み中、自分の頑張りを先生方に報告するために、中学校を訪れています。

事例3 通常の学級に在籍する

自閉症スペクトラム障害（ASD）のある生徒が高等学校に入学したケース

〈本事例の概要〉

中学校に入学後、不登校となった生徒です。欠席が続いたため、医療機関を受診したところ自閉症スペクトラム障害の診断を受けて服薬を始めました。

主治医から障害の説明を受けたことで、少しずつ自己理解が進みましたが、再登校にはつながりませんでした。家庭で過ごす時間が多くなりましたが、昼夜逆転することはなく、家族から教えてもらって学習したり、家庭教師の指導を受けたりするなど学ぶ意欲はありました。高等学校へ進学する気持ちは強く、将来的には大学進学を目指していました。

（1）学校での様子

〈学習面〉

- ・1年生の秋頃から、学習空白の時間が続いていたため、学年相応の学力は身に付いていないと思われました。

〈対人・行動面〉

- ・相手の気持ちを汲み取ることに課題がありましたが、周りの友達は保育所時代から知っているため、大きなトラブルに発展することはありませんでした。

（2）卒業に向けて

- ・中学校では、学年主任と学級担任が定期的に保護者と面談を行い、高等学校入学に向けた情報提供をしていました。
- ・保護者は合格が決まってから、本人がスムーズな高校生活が送れるように、生徒の様子を高等学校へ伝えることを強く望んでいました。3月下旬の入学説明会で保護者が直接、障害のことやそれに伴う配慮点を伝えました。中学校も保護者の同意を得て、学年主任が高等学校を訪問し、生徒の特性を伝えました。その結果、生徒の入学前に、自閉症スペクトラム障害に関する職員研修会が計画されました。

（3）まとめ

- ・保護者が子どもの情報を伝えたことで、高等学校の校長の意識が変わり、校内の職員の意識改革につながりました。同じ出身中学校の生徒が多くなるような学級編制としたり、生徒の様子を教科担任が記入する記録用紙を用意したりするなど、細かな配慮が実現しました。
- ・高等学校入学後、本人は同級生に分からない問題を教えるなど、みんなから認められる機会が増え、自分の居場所を見付けたことで少しずつ自信を取り戻し、ほとんど欠席することなく、大学進学という目標を達成するために、充実した高校生活を送っています。

事例4 特別支援学級（難聴）に在籍する生徒が高等学校に入学したケース

〈本事例の概要〉

重度感音性難聴の生徒です。小学校時から特別支援学級（難聴）に在籍していましたが、「みんなと一緒に勉強したい」という本人の思いから、五教科を中心に交流学級で学習していました。情報保障のため、交流学級の授業者はFMマイクを使用したほか、学級担任が本人の隣席で要約筆記（手書き及びPC）を行いました。聴覚支援学校との交流学习も重ねていましたが、小学生時から続けている部活動に引き続き取り組みたい、大学進学を目指したいという思いから、高等学校への進学を強く希望していました。

（1）学校での様子

〈学習面〉

- ・家庭学習の習慣が身に付いており、英語及び国語の聴き取りテストは、別室で教師がFMマイクを使用して問題文を読む形で行うことで、高い正答率でした。正しい音程で歌うことは困難でしたが、交流学級の一員として学級合唱に参加できました。

〈対人・行動面〉

- ・自分から積極的に友達や教師に関わることができました。同学年の生徒は、小学校時から難聴理解学習に取り組んでおり、身振りをしたり口元を見せて話したりしてコミュニケーションをとっていました。

（2）卒業に向けて

- ・高校受検に向けて、国語の聴き取りテスト及び英語のリスニングテストにおける難聴者に対する配慮について情報収集を行いました。また、実用英語技能検定における難聴者への配慮も参考にして、問題文をフラッシュカードで示す形で実施しました。
- ・7月に希望する高等学校の体験入学に参加しました。事前に体験授業をお願いし、授業者にFMマイクをつけてもらったほか、学級担任が隣席で要約筆記を行いました。また、保護者、学級担任と高等学校の校長で面談を行い、入学後に高等学校で可能な支援について相談しました。
- ・生徒本人の前で教師が問題文を読み上げて実施できるように、「特別配慮申請書」を高等学校に提出しました。

（3）まとめ

- ・「個別の支援計画」を送付したほかに、入学前に高等学校と直接引継ぎを行いました。
- ・高等学校ではホームルームの連絡事項を紙に書いて伝えたり、授業における板書やプリント類の情報量を増やしたりして支援したほか、教職員の難聴理解研修を行ったりしました。情報保障が最小限となったものの、本人は自分から周囲の人と積極的にコミュニケーションをとって情報を得るようにしており、同級生に分からない問題を教える様子も見られるなど、充実した高校生活を送っています。

事例5 通常の学級に在籍する生徒が特別支援学校高等部に入学したケース

〈本事例の概要〉

小学生時から登校しぶりが見られた生徒です。中学校入学後、2か月を過ぎたころから不登校となり、適応指導教室を利用しました。

適応指導教室には火曜日から金曜日の午前中、ほぼ欠かすことなく出席し、適応指導教室が休みの月曜日は、中学校で学級担任と生活ノートのやり取りなどをしました。しかし、学校へ登校して学習する意欲が低く、中学校卒業後の進路については就職を希望していました。

(1) 学校での様子

〈学習面〉

- ・学習全般に遅れがあり、学年相応の学力は身に付いていないと思われました。理科の学習に興味があり、適応指導教室では理科のワークに取り組むことが多くありました。

〈対人・行動面〉

- ・積極的に周囲の生徒と関わるタイプではありませんが、休日に数人の同級生と遊ぶことがありました。登校したときに、友達に強く誘われれば学級の中に入って過ごすことができました。家庭ではゲームをしたり、プラモデルを作ったりして過ごしていました。

(2) 卒業に向けて

- ・2年生時には「漁師になる」と話していましたが、3年生になって「乗り物酔いがあるので漁師にはなれない、別の仕事をしたい。」と話すようになりました。しかし、どんな仕事をしたいかという希望はなく、進学したくないから就職と答えているようでした。
- ・ハローワークに連絡し、中学生への求人が解禁されるとすぐに求人票を送ってもらいましたが、中学生の求人は少なく職種は限られることや、「やる気」が求められることに気後れし、「アルバイトをする」とも口にしましたが、アルバイト先を自分で見つけようと行動することはありませんでした。
- ・高等学校通信制、サポート校、技術専門校、特別支援学校高等部等の選択肢を示し、進学後の学習内容や入学における選抜方法を確認しました。その中で、特別支援学校高等部に興味を示したため、教育相談を申し込みました。ただし、入学を希望するかどうかは自分で決めるように促しました。
- ・特別支援学校への理解を深め、入学後の生活のイメージをもつことができるよう、体験学習を重ねました。また、中学校登校時には面接練習を行い、自信をもって高等部受検に臨むことができるようにしました。

(3) まとめ

- ・通常の学級に在籍する特別な教育的ニーズのある生徒に対して特別支援学校高等部の話を提示するには、高等部の教育課程や卒業後の進路状況などの情報を本人・保護者に伝えることが大切です。
- ・特別支援学校高等部では、作業学習や校内実習・現場実習を通して、好きな物づくりに取り組めることから、欠席することなく登校できています。

事例6 特別支援学級に在籍する生徒が特別支援学校高等部に入学したケース

〈本事例の概要〉

小学校時から特別支援学級に在籍していた生徒です。中学校でも3年間特別支援学級に在籍しました。母子家庭で、母親は夜勤の多い仕事をしていたため、時々、近所に住む祖母が面倒を見ていました。

中学校では進学先として寄宿舎のある特別支援学校高等部を提案しましたが、母親は地元の特別支援学校への進学を強く望んでいました。

(1) 学校での様子

〈学習面〉

- ・小学校3・4年生程度の内容を中心に学習を進めて、体育や音楽などの技能教科は交流学級の授業に参加しました。学習意欲があり、毎日宿題を楽しみにしていました。

〈対人・行動面〉

- ・同学年の生徒や部活動の後輩と話したい気持ちが強く、時々、物の貸し借りなどでトラブルになることがありました。
- ・生徒は現実と空想の区別がつかないことがあり、会話や文章から生徒の本心を読み取ることが難しいときがありました。

(2) 卒業に向けて

- ・多くの教職員や同学年の生徒と関わる機会を増やし、生徒と信頼関係を築くことに努めた結果、社会性が身に付き、周囲とよい関わりができるようになりました。
- ・進路学習では、県内の特別支援学校高等部についてインターネットで調べたり、新聞記事などで情報を得たりしたことを整理しました。3年生の9月からは、3校の特別支援学校の見学を計画しました。その結果、生徒は自立に向けて寄宿舎のある特別支援学校への進学を考えるようになりました。
- ・学校見学には母親も同行しましたが、寄宿舎のある特別支援学校は家から遠く、また、子どもが離れる寂しさから反対していました。
- ・生徒と母親の思いのずれを埋めることが難しかったため、学校見学だけでなく体験学習を行い、その上で生徒の希望を最優先することにしました。
- ・作業学習や寄宿舎泊体験を行った結果、最終的には生徒自身が進学先を選択しました。母親も生徒の進路を応援するようになったことで、生徒が安定しました。受検に向けて管理職の協力も得て、面接練習など具体的な内容を取り入れました。また、寄宿舎生活で必要な力を身に付けるために、家庭では洗濯や布団の上げ下ろしの練習をしました。

(3) まとめ

- ・進路先選択について生徒と保護者の考えが一致しない場合は、学校見学だけでなく、作業学習などの体験を通して、生徒本人の意思を最優先することや保護者を説得するのではなく納得できるまで寄り添う指導が大切です。自分で進学したい高等部を選んだことで、学校のリーダー的存在として活躍しています。

『コラム4』

「自分らしく生き生きと・・・」

先日、あるテレビ番組で、特別支援学級の子どもが「自分研究」というテーマで自分の癖や苦手なことに気づき、それを克服するためには、どんな工夫をすればよいか、先生と一緒に考えるという取組をしているところを見ました。その児童が、交流学級のみんなの前で堂々と自分の考えを発表している姿が印象的でした。

子どもたちは、成長するに従って程度の差こそあれ、自分と他人との違いに気づき始めます。以前出会った中学生は、「他の人は、休み時間になると行きたくなくても連れだってトイレに行く。だけど私は、それがとっても嫌でどうしたらいいかわからない。」と、周りの友達と自分の感じ方の違いにとっても戸惑っている様子でした。我々大人からすれば、ほんの些細なことでも自分と周りの違いを受け止め、折り合いをつけていくことは、とても難しいことです。発達に偏りがある場合にはなおさらと言えます。

自分が得意なこと、興味のあることは何か、反対に嫌いなことや苦手なことは何か分かっていること、いわゆる「自己理解」が「進路」を考える時に、とても重要なキーワードと言えます。前述の児童のように自分の癖や苦手なことに気付いていれば、工夫することができます。例えば、自分は他の人より作業に時間がかかると知っていれば、少し早めに登校して取りかかる事もできます。とは言え、自分自身の事をきちんと理解することは、以外に難しいことです。この年齢になっても自分のことをきちんと分かっているかと言われると自信がもてないのだから・・・。

諸外国に比べると日本の子どもたちは、自尊感情が低いと言われていています。いろいろなことができる自分、できない自分を全て含め、今の自分に「OK!」と言えることは、生きていく上でとても大切なことと言えます。自尊感情が低く「どうせ、僕・私なんか・・・。」という気持ちが強くなってしまえば、自分の将来に希望をもつことは難しいです。子どもたちが、今の自分を受け入れ、将来に向かって自ら選択し、一歩踏み出すためには、身近にいる人たちから、たくさん褒められ、認められる経験を積むことが不可欠です。

成長の途中にいる子どもたちの側にいる我々大人は、一人一人の違いを認め、その子のよいところを見付け、子どもたちが、自分の5年後10年後の未来に希望をもてるよう支えていきたいものです。

男鹿市立船川第一小学校 特別支援教育地域センター
特別支援教育アドバイザー 船木 祐子

5 特別な教育的ニーズのある生徒の進学に関する情報

(1) 進学の手続き

- ①校内で本人，保護者が学級担任と進路相談をする
- ②本人，保護者，学級担任が受検する学校の教育相談を申し込む（説明，見学，体験）
教育相談は，必要に応じて複数行う
- ③希望先決定後，学校を通して「入学願書」の交付を受け，出願する
- ④入学選考（受検）
- ⑤合格発表
- ⑥入学説明会

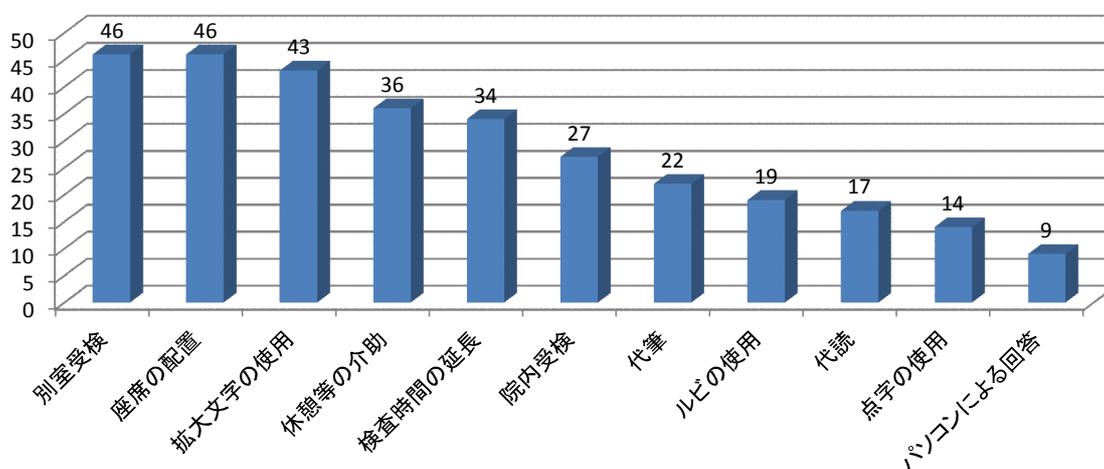
※公立高等学校への進学については，秋田県公立高等学校入学者選抜実施要項を参照する

(2) 高等学校受検に際しての特別な配慮

- ・受検に際して特別な配慮を必要とする障害等のある生徒の出願については，「秋田県公立高等学校入学者選抜実施要項」に基づいて，事前に特別配慮申請書を提出することが必要です。その際，事前に教育相談や学校見学を行った上で，生徒の様子や中学校で配慮していることを伝えたり，高等学校でできる指導の工夫等について尋ねたりします。
- ・受検では周囲の理解と公平性が求められるため，中学校の定期考査や3年生で実施する実力テストで配慮していた方法や個別の指導計画等が，重要な資料になりますので，事前に本人や保護者と話合いの機会をもつ必要があります。
- ・公立高等学校を受検する場合は，中学校を通して高等学校や県教育庁高校教育課へ，私立高等学校の場合は直接学校へ問い合わせをすることになります。
- ・特別配慮申請書に記載する例としては，別室受検，試験時間の延長，記述式ではなく選択式設問実施，集団面接を個人面接で実施，問題用紙の拡大等が考えられます。

(3) 入学者選抜学力検査における都道府県の「合理的配慮」の取組状況

提供している合理的な配慮の内容(都道府県数)



「高等学校における特別支援教育の推進」(2017) 全国都道府県教育長協議会第1部会より

【その他の配慮の内容】

配慮内容（自由記述）
○休憩時間の延長
○筆談による個人面接，待ち時間が短くなるよう面接順番の配慮，ルーペの使用を許可，国語の「聞くこと」に関する検査及び英語の「リスニング」においては，別室でCDプレーヤーを使用，個人面接の実施
○拡大鏡（ルーペ）の使用，英語の聞き取り検査の口唇読み取り，車いす用机の使用
○面接検査で，FM受信型補聴器を装着し，試験官がFM送信機を使用して実施
○英語のリスニングテストの代替問題，選択肢問題への変更，パソコン以外（タブレット等）のICT機器の使用
○保護者等の待機，面接順等の変更
○拡大鏡の持参使用，問題用紙・解答用紙の拡大印刷
○面接における筆談
○定規・コンパス使用時に監督者が補助 等

「高等学校における特別支援教育の推進」（2017）全国都道府県教育長協議会第1部会より

（４）特別支援学校高等部入学までの流れ

学校見学

★ 1回目 学校見学と教育相談

教育相談

- ・入学を希望する，しないにかかわらず，進路への関心を高めるために，学校見学を計画します。（申込み：中学校教頭→特別支援学校教頭）
- ・本人と保護者，学級担任と一緒に来校し，学校見学後に，高等部の生活や通学方法等について質問します。（教頭や高等部主事が対応）



体験学習

★ 2回目 体験学習（希望があれば複数回可能）

- ・実際に高等部の生徒と一緒に学習し，高等部生活を具体的にイメージします。



＜平成30年度秋田県立特別支援学校入学者選考 関係日程＞

- ①募集案内の送付 ★11月10日（金）に県→市町村教育委員会→各中学校という流れで送付
- ②入学願書等の配付 ★12月1日（金）
- ③入学願書等の受付 ★ 開始 1月12日（金） ★ 締切 1月22日（月）正午
★ 志願先変更開始 2月1日（木）
★ 志願先変更締切 2月13日（火）正午
- ④入学者選考 ★ 3月2日（金）
- ⑤合格者発表 ★ 3月9日（金）午後1時
- ⑥入学説明会 ★ 3月中旬～下旬 ※学校によって日程が異なる



(5) 秋田県特別支援学校高等部卒業生の進路先について

【特別支援学校高等部卒業生進路先状況の年度別推移】

年度	卒業人数	進学	訓練機関	就職	施設等	無職・在宅	就職者の割合
22	179	9	2	41	107	20	22.9%
23	204	3	3	51	130	17	25.0%
24	198	5	0	58	117	18	29.3%
25	197	3	0	75	105	14	38.1%
26	199	4	0	83	100	12	41.7%
27	198	9	0	70	108	11	35.4%
28	223	1	0	70	146	6	31.4%

秋田県教育委員会「平成29年3月特別支援学校高等部卒業者の就職決定状況について」より

【平成28年度 就職先の業種等】

業種等	人数	割合
卸売業・小売業（飲食料品，小売，衣料小売，自動車整備）	22	31.4%
福祉・医療（介護施設介護補助，館内清掃，病院内清掃）	18	25.7%
製造業（自動車，医療機器，縫製，電子部品，食品）	11	15.7%
生活関連サービス業（クリーニング，ビルメンテナンス，リサイクル）	10	14.3%
宿泊業・飲食サービス業（宿泊施設，飲食店）	4	5.7%
農業（農場，農業組合法人）	2	2.9%
保育施設（事務補助）	1	1.4%
教育機関（学習アシスタント）	1	1.4%
運輸業・郵便業（運送）	1	1.4%
計	70	

秋田県教育委員会「平成29年3月特別支援学校高等部卒業者の就職決定状況について」より

(6) 「個別の（教育）支援計画」・「個別の指導計画」の活用

- ・中学校で保護者の同意を得て、「個別の支援計画」を作成している場合は、引継ぎ資料として高等学校や特別支援学校高等部に提供することで、スムーズな移行支援が期待できます。また、「個別の指導計画」も作成している場合は、保護者の同意を得て、引継ぎ資料として活用します。
- ・高等学校では、「個別の支援計画」や「個別の指導計画」に記載されている情報を分析・整理し、教室環境及び学習環境を整備したり、本人及び保護者面談を実施したりします。

(7) 地域の組織の活用

- ・地区ごとに定期的に行われている「地域生徒指導研究推進協議会」をはじめ、特別支援学校が事務局となっている「特別支援教育連携協議会」や「高等学校連絡会」などを活用して、特別な教育的ニーズのある児童生徒の情報交換を行い、途切れない支援につなげることが大切です。

～ 主な引用・参考文献 ～

秋田県教育委員会（2015）「秋田県特別支援教育校内支援体制ガイドライン（三訂版）」

秋田県教育委員会（2009）「障害等のある生徒の高等学校進学にかかるガイド」

秋田県教育委員会（2014）「特別支援学校における進路指導ガイド（第10版）」

秋田県総合教育センター（2017）「特別支援学級新担任の手引（改訂版）」

埼玉県中学校進路指導研究会（2012）「文部科学省学習指導要領準拠 学級活動を核とした中学校キャリア教育」実業之日本社

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構（2015）「働く広場・5月号」廣済堂

日本進路指導協会編（2016）「これぞプロの技！中学校進路指導・キャリア教育Q&A」実業之日本社

別府哲・小島道夫・片岡美華（2014）「発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育」ジアース教育新社

松井賢二（2016）「中学校3年間のキャリア教育・進路指導」東洋館出版社

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領」

〈進路指導で大切なこと〉

- 1 自分で選ぶ
自分で選んだという意識があれば頑張りがきく
- 2 目的がもてる
目的があれば努力ができる，粘りがきく
- 3 自分を知る
自分の強みを生かして弱みをカバーする



子どもたちの夢を叶えよう！

〒010-0101

秋田県湯上市天王字追分西29-76

秋田県総合教育センター 支援班

特別支援教育担当

TEL : 018 (873) 7215 E-mail : ctok@akita-c.ed.jp